

□海外文献紹介□

胆嚢摘出と上行結腸癌の関
係

Relationship between cholecystectomy and ascending colon cancer: *L. J. Vernick et al* (Cancer 45: 392~395, 1980)

胆摘後にはデオキシコール酸プールが増加すると言われるが、デオキシコール酸と大腸癌は関係があり、あるいは1,2ジメチルヒドロラジンによる実験的大腸癌の発生率は胆摘により増加するといった報告などがある。アメリカ第3次全国癌調査(1969~71年)に際して、大腸癌の部位別の疫学的特徴を見出す目的で調査した。方法は同期間のペンシルバニア州A郡の全大腸癌2,767例から、年齢および性別がほぼ同一となるようにして、上行結腸癌124例、

横行167例、下行115例、S状154例、直腸癌146例の合計706例を抽出して、その入院病歴を見直した。

胆摘の既往の頻度は上行結腸癌から直腸癌に向かうに従って減じ、上行結腸癌の16.1%、横行結腸を含む右側結腸癌の13.0%に胆摘の既往があったのに対して、左側結腸癌では6.3%にすぎなかった。胆摘後の癌の予測危険率の右側結腸と左側結腸の比は2.23(95%信頼限界1.33~3.75)となる。

胆摘から大腸癌発生までの期間は、2年以内8.5%、8年以内44.7%、14年以内66%であった。上行結腸癌では右季肋部痛のために無症候性胆石が手術される機会が多いのではないかと疑いは、上述の期間からみて否定的である。第2の偏りとして、右側結腸癌例では鑑別診断の

必要上、より詳しく胆摘の既往を聴取したのではないかの疑問については病歴からはわからない。他の消化管手術についてはこのような関係を示すものはなかった。

上行結腸癌例では高率に胆摘の既往があることが判明したが、胆摘に伴う胆汁酸代謝の異常と発癌を関係づけるとすれば、上行結腸は最もその影響を受けやすいところである。胆摘は非常にしばしば施行される手術である。胆摘後の右側結腸癌の危険は相対的には小さいものと思われるが、この関係を認識することは、大腸癌の病因の理解を深めるために重要である。

(関東通信病院消化器内科

伊藤慎芳 抄)